

## 『子不語』 妬鬼説話拾遺

中 野 清

已に「妬鬼説話」については本論の後に「補遺」まで書いておいて、今更「拾遺」というのも情けない話だが、ただ粗見を恥づるのみ。

今回取り上げるのは、『鬼妬二則』（子不語卷二十三）である。二則あるので一則ずつ見ていく。

常德（湖南省）出身の張知府の娘は周氏の息子と許嫁であったが、十七歳で肺病で亡くなった。周氏の息子は王氏の娘と婚約した。年はやはり十七歳であった。婚約はしたがまだ結婚式の時期は決めていなかった。王氏の娘になにかが取りつき、手で自分の頬を打ちながら、「私は張知府の四女だけど、お前はどこの誰なのよ、私の旦那さまを奪おうとするのかい」と言う。周氏の息子はこの言葉を聞き、張知府に知らせに行った。

張夫人は家中を厳しく治めていたので、これを聞いて激怒

し、亡き娘の肖像畫を掛けて罵った。「お前は周の若さまと婚約はしていたが、まだ結婚式をあげないうちにお前は死んだ。周さんがまた嫁をもらおうとしても、それはあたりまえのことだ。どうしてわざわざかけて行って王さんの娘さんに祟ったりするのだ。こんな恥知らずに育てたつもりはない」。罵り終わると桃の枝を折ってきて肖像畫を叩いた。まだ幾つも叩かないうちに、門の外に周の息子が走って来て許しを請うた。何故來たのかと訊ねると、「王氏の娘が口で張氏の四女だと言って痛い痛いと呼んで行ってしまいました。彼女のために母親に事情を説明してくれとのことでした。ですから私がやってまいりました」と言う。王氏の娘はようやく愈えたのである。

常德の張太守の女は周氏の子に許なるも、年十七にして療疾を以て亡ず。周は別に王氏の女を聘す。年は亦た十七にして甫て締姻するも尙ほ婚期無し。王女忽ち惡に中り、手

## 中國詩文論叢 第三十七集

を以て頬を批ちて曰く、我は張四小姐なり。汝何人にして敢へて我が郎君を奪はんとする、と。周氏の子これを聞き、太守に告ぐ。太守夫人は家治むること素より嚴なれば、これを聞きて大に怒り、亡女の畫像を懸けて罵りて曰く、汝周郎と姻を連ねんとするも、尙ほ未だ親を成さずして汝は死せり。周郎再び娶らんとするも、亦た禮の常なり。何を以てか往きて王家の女を害し、恥づる無きことは是の若き、と。罵り畢り桃の枝を折りてこれを撃つ。未だ數し下たざるも、門外に周郎奔り來りて饒を求む。何の故にと問ふに、曰く、王女は口に張四小姐と稱し痛を呼びて去れり。竝びに他の替に母親に情を説くを求む。故に壻特に來れり、と。王氏の女竟に愈ゆ。

常德張太守之女許周氏子、年十七以瘵疾亡。周別聘王氏女。年亦十七甫締姻尙無婚期。王女忽中惡、以手批頰曰、我張四小姐也。汝何人敢奪我郎君。周氏子聞之、告太守。太守夫人治家素嚴、聞之大怒、懸亡女畫像罵曰、汝與周郎連姻、尙未成親汝死。周郎再娶、亦禮之常。何以往害王家女、無恥若是。罵畢折桃枝擊之。未數下、門外周郎奔來求饒。問何故、曰、王女口稱張四小姐呼痛去矣。竝求替他母親說情。故壻特來。王氏女竟愈。

清朝では「太守」は「知府」の尊稱である。従四品官。高級官僚の家の話である。だから相手方の「周氏」というのも讀書

人の家なのであろう。ただし張知府は現在どこの知府なのかは記していない。出身は湖南省の常德。

その張太守の娘が周氏の息子と婚約したが十七歳で死んだ。周氏はやはり十七歳の王氏の娘と婚約したが、式の日取りは決めていない。ふと王の娘になにかが取りつき、手で自分の頬を打ち、「張知府の四女だが、お前は私の旦那を奪うのか」と言つて祟る。周氏の息子はそれを太守に告げる。

ここまでは事實關係を、それこそ最少の文字數でと言つて良いくらい簡潔に記す。

太守夫人は家を厳しく治めていたので、激怒し娘の肖像畫を掛けて罵った。

「お前は周さんと婚約はしたが、結婚式をあげる前にお前は死んだ。周さんがまた婚約しても、それは『禮の常』だ。なんで王の娘に祟つたのだ。こんな恥知らずに育てていない。」

この部分のポイントは「禮」である。制度的に正しいかどうかだけが問題なのである。「禮の常（制度的に正しい）」であれば「情」などは關係ないのである。

もっとも、結婚式までは互いの顔を見ることがない、というのがこの時代の讀書人の家の常であるから、「情」が有ったのかどうかも定かではない。

罵り終わると桃の枝で肖像畫を叩いた。まだ幾つも叩かないうちに、周の息子が來て許しを請うた。何故來たのかと訊ねる

と、「王氏の娘が口で張氏の四女だと言い痛い痛いと呼んでいました。彼女のために母親に事情を説明してくれと言いま。ですから私がまいりました」と言う。王氏の娘はようやく癒えた。太守夫人が娘に教育的指導を施す、或いは折檻をするのに、娘の肖像畫を懸けてそれに向かって罵り、桃の枝で打つという部分。

桃の枝を使い魔勝するというのは、基本的には不祥・邪氣を攘うということなので、太守夫人にとっては自分の娘であっても禮に悖る行いをする鬼は邪惡なる存在ということなのだろう。

この一則は「張四小姐」という一語を除いては、本文も科白も全て文言である。

杭州の馬坡巷に住んでいる謝という爺さんは魚賣りであった。二人娘がいたが、二人とも美形だった。武生員（武秀才）の李某というものがいた。娘を見て慕わしく思った。李の容貌もまた美しいので、先に母方のいとこの王氏が慕っていた。人に結婚の話の仲立ちしてもらったが、李は王氏をきらい、謝の娘と結婚しようとした。王氏は肺病で死んだ。謝の娘が嫁行つてまだ一月も経たないうちに、髪を振り亂し狂つたように、「私は王氏だよ。お前なんか魚賣り娘のくせに、どうして私の秀才を奪えるっていうんだい」と言うと、几の上

『子不語』 妬鬼説話拾遺（中野）

の鉄を手を持ち自分でその胸を刺して、「お前の蜜羅柑を取ってやる」と言う。謝爺さん夫妻は秀才の家に呼かけて行き紙錢を焼いて祭壇を作り跪いてお願いしたのだ、とうとう救けることができなかった。蜜羅柑とはどんな物だと訊ねると、「お前の娘の心肝だよ」と言う。それから程なくして娘はとうとう死んだ。秀才がまたやって来て妹を嫁にしたいと言う。謝爺さんは警戒して許さなかった。しかし妹は秀才の容貌を慕って、「私は幽鬼を恐れません。もしも幽鬼が來たら、私が刀を振るって殺し、姉の爲に仇を討ちます」と言う。謝は仕方がないので、その言葉どおりに嫁にやった。結婚したあと幽鬼はとうとう出て來なかった。秀才の爲に一人の息子を生んだがその後秀才に死なれ寡婦になった。

杭州馬坡巷の謝叟は魚を賣るを業と爲し、二女を生むに俱に姿有り。武生の李某なる有り、見てこれを悦ぶ。李の貌も亦た美なれば、先に表妹の王氏有りてこれを慕ふ。人に托して婚を説くも、李は王氏を卻け、婚を謝に就かんとす。王氏は療を以て亡ず。謝の嫁して未だ月を逾へざるに、忽ち披髮し佯狂して口に、我は王氏なり。汝一個の魚賣りの婆、何ぞ我が秀才を奪ふを得ん、と稱し、几上の剪刀を取り自ら其の心を刺して曰く、汝の蜜羅柑を取らん、と。謝叟夫妻は秀才の家に往き紙錢を焼きて齋醮を作し跪き求むるも、卒に救ふ能はず。蜜羅柑は何物ぞと問ふに、曰く、汝の女兒の心肝な

## 中國詩文論叢 第三十七集

り、と。未だ幾ならずして女竟に死せり。秀才又た來りて其の妹を聘すを求む。謝叟戒心ありて許さず。妹其の貌を悦びて曰く、我鬼を畏れず。如し其れ來れば、我將に刀を揮ひてこれを殺し、姊の爲に仇を報ぜんとす、と。謝は已むを得ず、仍りてこれを嫁與す。婚するの後鬼は竟に寂然たり。秀才の爲に一子を生むも寡居す。

杭州馬坡巷謝叟賣魚爲業、生二女俱有姿。有武生李某、見而悅焉。李貌亦美、先有表妹王氏慕之。托人說婚、李卻王氏就婚於謝。王氏以療亡。謝嫁未逾月、忽披髮佯狂口稱、我王氏也。汝一個賣魚婆、何得奪我秀才。取几上剪刀自刺其心曰、取汝蜜羅柑。謝叟夫妻往秀才家燒紙錢作齋醮跪求、卒不能救。問、蜜羅柑何物。曰、你女兒之心肝也。未幾女竟死。秀才又來求聘其妹。謝叟有戒心不許。妹悅其貌曰、我不畏鬼、如其來、我將揮刀殺之、爲姊報仇。謝不得已、仍嫁與之。婚後鬼竟寂然。爲秀才生一子而寡居。

こちらは庶民の家の話。

杭州に住んでいる謝爺さんは魚賣りだった。二人娘が二人とも美人だった。武生員（武秀才）の李某が娘を見て氣に入った。李も美男なので、先に母方のいとこ王氏が結婚話を持ち込んだが、李は王氏をきらい、謝の娘と結婚しようとした。王氏は肺病で死んだ。

武生は武生員のことと武秀才ともいう。武科擧のほうは普通

の科擧（文の）と較べて數段低く見られているので、武秀才などは庶民と選ぶところは無い。

だからその行動も全く「禮」に則らず欲望の赴くままである。まずお互いの容貌である。

美男の李秀才が、美女である謝の娘と結婚する。王氏の美醜についてはふれていないが、たぶん「不美」なのだろう。

結婚して一月も経たないうちに、謝の娘に王氏が憑依する。

「私は王氏だよ。魚賣り娘のくせに、私の秀才を奪えるのか」と罵り、缺で自分の胸を刺して「お前の蜜羅柑を取ってやる」と言う。謝爺さん夫妻は秀才の家に引き紙錢を焼いて祭壇を作り跪き願ったが、救けられなかった。

蜜羅柑とは何物と訊くと、「娘の心肝だよ」と言う。それから程なくして娘は死んだ。

剪刀（鋏）を胸に刺し肝を取ってやる、というところがおどろおどろしい。嫉妬に狂った若い女という感じが出ている。

こういうとんでもない事件の後の、秀才の行動はまったくあされたものである。

事件後どのくらいの時間が経過したのかは記されていないが、「禮」によれば「妻死すれば齊衰一年」の喪に服すはずである。<sup>(1)</sup>いくら武秀才でもこれは守っているはずだ。

だから時間の経過は記されていないのであろう。たぶん一年経つてすぐに、であろう。

秀才がまた妹を嫁にしたいと言う。謝爺さんは警戒して許さなかった。

警戒して許さない、というのは當然である。

それなのに今度は妹が秀才の容貌を慕って、「私は幽鬼を恐れませんが、もしも幽鬼が来たら、私が刀を振るって殺し、姉の爲に仇を討ちます」と言う。謝は仕方がないので、その言葉どおりに嫁にやった。

妹其の貌を悦びて曰く、とあるとおり、「貌」なのである。

結婚したあと幽鬼は出て来なかった。秀才の爲に一人の息子を生んだがその後秀才に死なれ寡婦になった。

別にバチに中ったというわけでもないのだろう、ただ寡婦になったというだけである。

この一則はただ容貌・容色だけである。「禮」よりは「好色」である。科白の部分に白話的語彙を含むが基本は文言である。

どうしてこのような話を二則列べたのか？

讀書人は「禮」を行動規範とするが、庶民は「色」しか無いという批判ではもちろん無い。ともに人の世には有り得ることであり、單にまだ文章化していないものが二則有ったというだけであらう。

# 【注】

(1) 拙著『中國怪異譚の研究』文言小説の世界 研文出版

『子不語』妬鬼説話拾遺(中野)